

GALLERY

KOYANAGI

PRESS RELEASE

中村裕太

耽奇展覧

ユアサエボシ

Yuta Nakamura | Ebosi Yuasa

Object Lessons



報道関係者各位

平素よりお世話になっております。

この度ギャラリー小柳では、2023年1月28日（土）から3月31日（金）の会期にて、中村裕太とユアサエボシによる二人展「耽奇展覧」を開催いたします。

中村裕太は1983年東京生まれ、現在は京都を拠点に活動しています。日本近代の工芸文化に関心を寄せ、「民俗と建築にまつわる工芸」という視点から陶磁器やタイルなどの学術研究と作品制作を行なっています。綿密なリサーチをもとに蒐集された陶片や古書、絵葉書などの一次資料と、中村の手で作り出されたオブジェを組み合わせて構成する精緻なインスタレーションにより、独自の眼差しで見直された史実や文化の有様を映し出します。

ユアサエボシは1983年千葉県に生まれ、現在も千葉県を拠点に活動しています。澁澤龍彦の著作を通じて知ったシュルレアリスムの影響を受けたユアサは、自身を大正時代生まれの架空の画家「ユアサエボシ」に擬態し、福沢一郎や山下菊二ら往時のシュルレアリスムに根ざした表現者たちの絵画の雰囲気をもたえる作品を制作しています。そのようにして描かれた絵画を架空のユアサエボシの画業に当てはめていき、当時存在していたかもしれない画家の人生を偽装していくのです。

一見対照的なスタイルをとっているように見える中村とユアサですが、共に興味を抱くのは大正から戦前、戦後の文化と習俗。意気投合した同い年の二人の作家は展覧会のテーマを求めて古書店街をめぐり、骨董市を訪れます。そしてとある古書店で巡り合ったのが中村が探していた『耽奇漫録』（1824～25年）の復刻本でした。江戸時代後期に曲亭馬琴など時の好事家たちが珍奇な古書画や古器物を持ち寄って論評しあった「耽奇会」。その図譜である『耽奇漫録』にいたく興味を惹かれた中村とユアサは、それぞれの「耽奇なるもの」を考察していきます。

中村にとって「耽奇なるもの」とは憧れの対象であるが故に、一步下がって客観的に検証すべきもの。今まで中村は歴史のなかで見過ごされがちなものに敢えて注目し、言わば媒介者として歴史の新たな面を紐解いて作品を制作してきました。今回の展覧会では、中村がこれまでに調査してきた文献を素材として、様々な時代や文化の耽奇的なものを参照した陶器作品を発表します。古代インカの鳴壺から明治期の実用新案の千鳥瓶、ユクスキュル『生物から見た世界』（1934年）の挿絵までをも掛け合わせた中村裕太による新たな陶器作りをご覧ください。

一方、ユアサは「耽奇なるもの」に圧倒的な親近感を覚え、架空のユアサが描くシュルレアリスティックな作品群と同じ空気感を感じました。一昨年、ギャラリー小柳での「still life 静物」展で初めて静物画を発表したユアサは、今回の展示もすべて静物画で構成します。ユアサは、『耽奇漫録』に出会った後も骨董市通いを続け、耽奇なるオブジェを収集しました。主に架空のユアサが生きた時代の事物の図版をもとに制作してきたユアサですが、今回はそれらに加え、実物のオブジェと対峙して描いた作品を発表します。

今回の展覧会では、中村裕太とユアサエボシがそれぞれ感じた耽奇なるものを展覧いたします。歴史をテーマに軽やかに遊ぶ中村とユアサの「ものによる学び Object Lessons」の試みをお楽しみください。

会期中、様々なアーティストが寄せた「私の耽奇なるもの」を中村とユアサが東京国立近代美術館主任研究員の成相肇氏と鑑賞し合い、また中村とユアサが収集した耽奇なオブジェの「今様耽奇合戦」も開催、ギャラリー小柳のウェブサイトにてアーカイブ配信いたします。

また、本展覧会よりギャラリー小柳ではオープニング・レセプションの再開を予定しております。展覧会の初日、1月28日（土）は午後5時から7時まで、両作家在廊にてオープニング・レセプションを行いますので、ぜひお立ち寄りいただけますようお願いいたします。

資料および図版のご依頼は担当者までご連絡ください。
ご掲載の際にはご一報いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

ギャラリー小柳

【広報用図版】

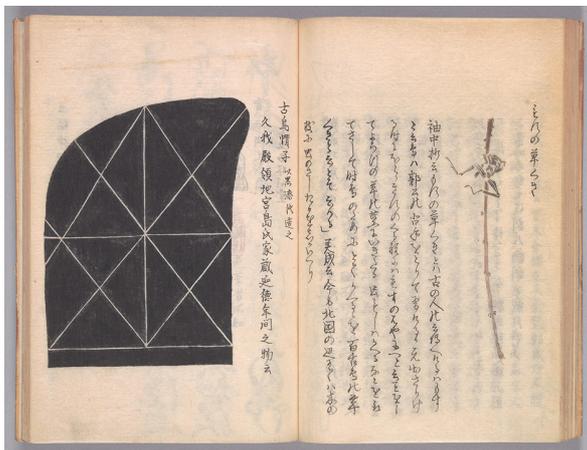


キャプション：

ユアサエボシ《密閉された瓶》2022年
中村裕太《ひよこの水差し》2022年

クレジットライン：

© Yuta Nakamura / Ebosi Yuasa / Courtesy of Gallery
Koyanagi
Photo: Keizo Kioku



参考図版：『耽奇漫録』1824-25年（文政7-8年）、
国立国会図書館デジタルコレクションより



参考図版：ユアサエボシ（左）、中村裕太（右）、
神田古書店街にて

中村裕太

1983年東京生まれ、京都在住。2011年京都精華大学博士後期課程修了。博士（芸術）。京都精華大学芸術学部准教授。〈民俗と建築にまつわる工芸〉という視点から陶磁器、タイルなどの学術研究と作品制作を行なう。文献調査やフィールドワークによる観察をもとに仮説を積み上げ、自らの手で実験した造形物を通して、近代以降の周縁的な工芸文化を考察していく。近年の展示に「第17回イスタンブール・ビエンナーレ」（パリシ・ハン、2022年）、「眼で聴き、耳で見る | 中村裕太が手さぐる河井寛次郎」（京都国立近代美術館、2022年）、「万物資生 | 中村裕太は、資生堂と を調合する」（資生堂ギャラリー、2022年）、「丸い柿、干した柿」（高松市美術館、2021年）、「ツボ_ノ_ナカ_ハ_ナンダロナ?」（京都国立近代美術館、2020年）、「MAM リサーチ 007: 走泥社—現代陶芸のはじまりに」（森美術館、2019年）、「日本ラインの石、岐阜チョウの道」（美濃加茂市民ミュージアム、2018年）、「柳まつり小柳まつり」（ギャラリー小柳、2017年）、「あいちトリエンナーレ」（愛知県美術館、2016年）、「第20回シドニー・ビエンナーレ」（キャリッジワークス、2016年）、「第8回アジア・パシフィック・トリエンナーレ」（ギャラリー・オブ・モダン・アート、2015年）、「六本木クロッシング2013展:アウト・オブ・ダウト—来たるべき風景のために」（森美術館、2013年）など。著書に『アウト・オブ・民藝』（共著、誠光社、2019年）、『アウト・オブ・民藝 | ロマンチックなまなざし』（共著、誠光社、2022年）。

<http://nakamurayuta.jp/>

ユアサエボシ

1983年千葉県生まれ、千葉県在住。2005年東洋大学経済学部卒業。大学卒業後に就職した金融関係の会社が倒産、その後画家になることを決意し美術学校に進学。大正生まれの架空の三流画家、ユアサエボシ（1924–1987）に擬態し、当時のシュルレアリスムの雰囲気をつたえた作品を制作する。この架空の作家の人生を巧妙に組み立て、そこに作品を当てはめていく創作を行う。主な展覧会に、2022年「高松コンテンポラリーアート・アニュアル ここに境界線はない。／?」（高松市美術館（香川））、「奇想のモード：装うことへの狂気、またはシュルレアリスム」（東京都庭園美術館、東京）、2019年「プラパゴンの馬」EUKARYOTE（東京）、2018年「シェル美術賞アーティストセレクション」国立新美術館（東京）、2017年「岡本太郎現代芸術賞」川崎市岡本太郎美術館（神奈川）、中之条ビエンナーレ2017（群馬）。主な受賞は、2018年第10回絹谷幸二賞など。

【展覧会概要】

展覧会名：中村裕太 | ユアサエボシ 耽奇展覧

会期：2023年1月28日（土）～3月31日（金）

開廊時間：12:00～19:00

休廊日：日・月・祝祭日

[オープニング・レセプション 1月28日（土）17:00～19:00 作家在廊]

会場：ギャラリー小柳 東京都中央区銀座1-7-5 小柳ビル9F

Tel: 03-3561-1896 Fax: 03-3563-3236

交通：東京メトロ有楽町線 銀座一丁目駅7番出口より徒歩1分

丸ノ内線・銀座線・日比谷線 銀座駅A-9出口より徒歩5分

URL：<http://www.gallerykoyanagi.com>

お問い合わせ：ギャラリー小柳 電話 03-3561-1896 | メールアドレス mail@gallerykoyanagi.com

*新型コロナウイルス感染症の影響により、今後の状況によっては、開催時期・内容等を変更する場合がございます。その際は、ギャラリー小柳のウェブサイトにてご案内いたします。

中村裕太

- 1983 東京生まれ
 2011 京都精華大学博士後期課程修了 博士（芸術）
 2016 文化庁新進芸術家海外研修員（短期）、オーストラリア（シドニー）
 現在 京都在住／京都精華大学芸術学部准教授

主な展覧会

- 2023 「中村裕太 | ユアサエボシ 耽奇展覧」 ギャラリー小柳（東京）
 2022 「第 17 回イスタンブール・ビエンナーレ」 バリンハン、イスタンブール、トルコ
 「東北へのまなざし 1930-1945」 岩手県立美術館（岩手）／福島県立美術館（福島）／
 東京ステーションギャラリー（東京） [軸原ヨウスケ+中村裕太]
 「眼で聴き、耳で視る | 中村裕太が手さぐる河井寛次郎」 京都国立近代美術館（京都）
 「万物資生 | 中村裕太は、資生堂と を調合する」 資生堂ギャラリー（東京）
 2021 「新しい成長」の提起 ポストコロナ社会を創造するアーツプロジェクト」
 東京藝術大学大学美術館（東京）
 「丸い柿、干した柿」 高松市美術館（香川）
 「タイルとホコラとツーリズム season8」 下京いきいき市民活動センター（京都）
 [谷本研+中村裕太]
 「根の力」 大阪日本民芸館（大阪） [軸原ヨウスケ+中村裕太]
 2020 「ツボ_ノ_ナカ_ハ_ナンドロナ？」 京都国立近代美術館（京都）
 「アウト・オブ・民藝 | 秋田雪櫃編 タウトと勝平」
 秋田公立美術大学ギャラリー-BIYONG POINT（秋田） [軸原ヨウスケ+中村裕太]
 2019 「やんばるアートフェスティバル 2019-2020」 大宜味村立旧塩屋小学校（沖縄）
 [谷本研+中村裕太]
 「in number, new world / 四海の数」 芦屋市立美術博物館（兵庫）
 「表現の生態系 | 世界との関係をつくりかえる」 アーツ前橋（群馬）
 「タイルとホコラとツーリズム season6」 広島市現代美術館（広島） [谷本研+中村裕太]
 「MAM リサーチ 007: 走泥社—現代陶芸のはじまりに」 森美術館（東京）
 「藤井達吉の家庭手芸のすすめ」 ノムラテラー（京都） [APP ARTS STUDIO]
 2018 「石黒宗麿と八瀬陶窯 一五〇年目の窯出し」 ギャラリーフロール（京都）
 「日本ラインの石、岐阜チョウの道」 美濃加茂市民ミュージアム（岐阜）
 「アスピレーションズ—8つの扉」 京都精華大学ギャラリーフロール（京都）
 「アウト・オブ・民藝」 誠光社（京都） [軸原ヨウスケ+中村裕太]
 「第 20 回 DOMANI・明日展」 国立新美術館（東京）
 2017 「柳まつり小柳まつり」 ギャラリー小柳（東京）
 「アジア回廊 現代美術展」 京都芸術センター（京都） [谷本研+中村裕太]
 「タイル植物園 熱帯植物の観察術」 名古屋市東山植物園（愛知）
 2016 「瀬戸内国際芸術祭 2016」 高見島（香川） [APP ARTS STUDIO]

- 「あいちトリエンナーレ 2016」愛知県美術館（愛知）
 「第 20 回シドニー・ビエンナーレ」 キャリッジワークス（シドニー、オーストラリア）
 2015 「第 8 回アジア・パシフィック・トリエンナーレ」 ギャラリー・オブ・モダン・アート
 （ブリスベン、オーストラリア）
 「知らない都市 Inside Out」 京都精華大学ギャラリーフロール（京都）
 2014 「タイルとホコラとツーリズム」 ギャラリーパルク（京都） [以降 2015、2016、2018]
 2013 「六本木クロッシング 2013 展:アウト・オブ・ダウトー来たるべき風景のために」
 森美術館（東京）

主な刊行物

- 2022 『アウト・オブ・民藝 | ロマンチックなまなざし』 誠光社 [軸原ヨウスケ共著]
 「ふしめがちな蒐集家」 『ECONOMIES OF MINGEI : THEASTER GATES 2018-2019』
 大林財団
 2021 「鳥獣戯画の湯呑」 『ユリイカ』 772 号、青土社
 「中村裕太は長谷川三郎に何を見たのか 《眼横鼻直》と蒲鉾板版木を中心に」 『民族藝術学
 会誌 arts/ 』 vol.37、民族藝術学会 [服部正共著]
 2020 「かまぼこを抽象する」 『in number, new world / 四海の数』 芦屋市立美術博物館
 『アウト・オブ・民藝 | 秋田雪櫃編タウトと勝平』 秋田公立美術大学、アーツセンターあきた
 「土の柔らかいうちに」 『MAM リサーチ 007 : 走泥社一現代陶芸のはじまりに』 森美術館
 2019 「ゲテモノかハイカラか」 『表現の生態系 | 世界との関係をつくりかえる』 左右社
 「蔓と柵」 『花椿』 冬号、資生堂
 『アウト・オブ・民藝』 誠光社 [軸原ヨウスケ共著]
 『日本ラインの石、岐阜チョウの道』 美濃加茂市民ミュージアム
 2018 「生活のレクリエーション」 『現代の眼』 629 号、東京国立近代美術館
 「モースの手遊び」 『第 20 回 DOMANI・明日展』 文化庁

ユアサエボシ

- 1983 千葉県生まれ 千葉県在住
 2005 東洋大学経済学部卒業後、商品先物取引会社に就職するも半年で倒産
 一転して画家になる決心をする
 2008 東洋美術学校 絵画科 卒業

受賞歴

- 2018 第10回 絹谷幸二賞
 2017 アクリルガッシュビエンナーレ 2016 佳作
 2015 第13回 千葉市芸術文化新人賞
 2013 第28回 ホルベイン・スカラシップ奨学生
 GEISAI#19 ガブリエル・リッター賞
 第9回 世界絵画大賞展 協賛社賞
 第8回 タグボートアワード 青山悟賞

個展

- 2019 「侵入するスペクトル」AKIO NAGASAWA GALLERY AOYAMA (東京)
 「曲馬考」銀座 蔦屋書店 アートウォールギャラリー (東京)
 「プラパゴンの馬」EUKARYOTE (東京)
 2014 「TWS-Emerging 2014/News paper collage project」トーキョーワンダーサイト渋谷 (東京)
 2013 GEISAI#19 ガブリエル・リッター賞「ユアサエボシ個展」Hidari Zingaro (東京)

グループ展

- 2023 「中村裕太 | ユアサエボシ 耽奇展覧」ギャラリー小柳 (東京)
 「やんばるアートフェスティバル 2022-2023」大宜味村立旧塩屋小学校 (沖縄)
 「2022年度 コレクション展4: 素材とあそぶ」高松市美術館 (香川)
 2022 「Alter Ego」Noblesse Collection (ソウル、韓国)
 「Paprika」EACH MODERN (台北、台湾)
 「VOCA 展 2022: 現代美術展望—新しい平面の作家たち—」上野の森美術館 (東京)
 「高松コンテンポラリーアート・アニュアル vol. 10: ここに境界線はない。／？」
 高松市美術館 (香川)
 「ACT Vol. 4 接近、動き出すイメージ」トーキョーアーツアンドスペース本郷 (東京)
 「奇想のモード: 装うことへの狂気、またはシュルレアリスム」
 東京都庭園美術館 (東京)
 2021 「still life 静物」ギャラリー小柳 (東京)
 2020 「森-Deep Forest-」YOSHIKI INOUE GALLERY (大阪)
 「3331 ART FAIR 2020」3331 Arts Chiyoda (東京)
 2019 「買える! アートコレクター展」MEDEL GALLERY SHU (東京)

- 「I 氏コレクション展 今どきアート 2020 全て初めて」
 富岡市立美術博物館・福沢一郎記念美術館（群馬）
 「東京インディペンデント 2019」東京藝術大学大学美術館 陳列館（東京）
 「ザ・プレミアム平成ショー」THE blank GALLERY（東京）
 2018 「シェル美術賞アーティストセレクション 2018」国立新美術館（東京）
 「パーブルーム大学附属ミュージアムのヘルスケア」常陸太田市郷土資料館 梅津会館（茨城）
 「Multi shutter」EUKARYOTE（東京）
 「六甲ミーツ・アート 芸術散歩 2018」六甲山（兵庫）
 「バラックアンデパンダン」BARRAKI（沖縄）
 2017 「ゲンビどこでも企画公募 2017」広島市現代美術館（広島）
 「ground under」セゾンアートギャラリー（東京）
 「中之条ビエンナーレ 2017」群馬県中之条町（群馬）
 「第 7 回 新鋭作家展」二次審査プレゼンテーション展示公開
 川口市立アートギャラリー・アトリア（埼玉）
 「第 20 回 岡本太郎現代芸術賞展」川崎市岡本太郎美術館（神奈川）
 2016 「Independent TAGBAOT ART FES」ヒューリックホール（東京）
 2015 「シブヤのタマゴ さよなら区庁舎」渋谷区総合庁舎（東京）
 「合同展」千葉市文化センター（千葉）
 「第 11 回 世界絵画大賞展」東京都美術館（東京）
 2014 「3331 千代田芸術祭 2014 アンデパンダン展」3331 アーツ千代田（東京）
 2013 「シェル美術賞 2013」国立新美術館（東京）
 「GEISAI#19」都立商業貿易センター 台東館（東京）
 「ASIAN AGE III展」アートコンプレックスセンター（東京）
 2013 「第 9 回 世界絵画大賞展」東京都美術館（東京）
 「TAGBOAT@Bunkamura」Bunkamura Gallery（東京）
 「タグボートアワード in 台北」ArtSpace 金魚空間（台北）
 「トーキョーワンダーウォール公募 2013 入選作品展」東京都現代美術館（東京）
 「第 8 回 タグボートアワード」世田谷ものづくり学校（東京）

パブリックコレクション

高松市美術館（香川）

イベント、その他

- 2019 ARTISTS meet GAP 50th ANNIVERSARY 限定コラボレーション Tシャツデザイン
 2018 「時代に生き、時代を超える 板橋区立美術館コレクションの日本近代洋画 1920-1950s」
 館林美術館（群馬）関連ワークショップ「戦時下における作品制作術」

「架空の三流画家 ユアサエボシの略歴」

1924年（0歳）

千葉県東葛飾郡布佐町に湯浅耕治、カズエの長男として生まれる。本名湯浅浩幸。
親類に湯浅彗策がいる。

1933年（9歳）

両親に連れられ上野にハーゲンバックサーカスを観に行く。

1938年（14歳）

布佐尋常高等小学校卒業。画家を志す。

1940年（16歳）

挿絵画家の小林秀恒に弟子入りを志願するも病気を理由に断られる。

東京で看板屋の仕事に就く。

『日刊美術通信』に掲載されていた福沢一郎絵画研究所の募集要項を見て入所を決める。
研究所でエルンストの画集『百頭女』を見て衝撃を受ける。エルンストに倣い画集や雑誌の図版を組み合わせた作品を制作する。
またテレピンなどの揮発性油アレルギーが発覚したため、研究所内では鼻口を布で覆った状態で制作に励む。

1941年（17歳）

福沢一郎が治安維持法違反の疑いで逮捕されたため研究所は閉鎖。看板屋の仕事に専念する。

1943年（19歳）

閉鎖となっていた研究所で留守番をしていた山下菊二と出会う。山下が描いていた《日本の敵米国の崩壊》の制作助手を務める。

戦時下の子供たちが愛読した雑誌『少年倶楽部』の挿絵を使ってコラージュ作品を制作する。

（戦時下では絵具も配給制になり、末端の作家たちは満足して絵画制作を行うことが出来なかった。
ユアサも絵画制作の代わりにコラージュ作品を主に制作していた。）

1944年（20歳）

徴兵検査を受けるが、当時重度のヘルニアだったため戊種判定で不合格となる。

1945年（21歳）

進駐軍相手に瓦に似顔絵を描き日銭を稼ぐ。

（当時の似顔絵師たちはお互いの素性を詮索されぬよう、あだ名で呼びあっていた。ユアサはいつも寝癖が酷く逆立っていて、烏帽子のようであったことから“エボシ”と呼ばれるようになる。後にユアサエボシを作家名とする。）

進駐軍がもたらしたアメリカ文化の影響を受ける。

1947年（23歳）

山下菊二、高山良策らが結成した前衛美術会に参加する。

第1回前衛美術展に出品。以後1950年の第4回まで毎年出品する。

研究所時代の知人である加太こうじに頼み、紙芝居の着色を担当する“ヌリヤ”の仕事をまわしてもらう。

1950年 (26歳)

兵庫県西宮市で開催されたアメリカ博覧会へ行き感銘を受ける。将来渡米することを決意する。

1951年 (27歳)

政治色が強かった前衛美術会に嫌気がさし脱退する。

1953年 (29歳)

第1回ニッポン展に出品する。

1956年 (32歳)

ニューヨークに渡米する。レストランで皿洗いの仕事をしながら作品を制作する。雑誌、新聞など作品に使えるものを日々買い漁る。

岡田謙三、篠田桃紅らと交流する。

アクリル絵具に出会い以後制作に使用するようになる。

1958年 (34歳)

ヘルニア再発のため帰国する。帰国途中に経由地のハワイで小田実と出会う。

アメリカで購入してきた雑誌記事をもとに作品を制作する。

自らの絵画を自嘲の意味も含め“舶来転地様式”と名付ける。

(福沢一郎絵画研究所でのシュルレアリスムの影響、進駐軍がもたらしたアメリカ文化の影響、前衛美術会でのルポルタージュ絵画の影響を受けながら、独自の絵画を展開する。)

1959年 (35歳)

山下菊二夫妻の紹介で2歳年下の石嶋康代と知り合い結婚する。

1962年 (38歳)

長男暁夫が生まれる。

1964年 (40歳)

第8回シェル美術賞に《騎士》を出品して佳作入選する。

1965年 (41歳)

京橋の貸画廊で個展を開催する。《魔術師》と共に“黒い紙芝居シリーズ”を展開する。

小田実と再会する。“黒い紙芝居シリーズ”は小田とともに個展に訪れた鶴見俊輔が名付けたもの。

東京オリンピック後の不況から生活苦になりガードマンの仕事を始める。

1979年 (55歳)

第5回从展への出品を最後に、世間から距離を取るようになる。

アトリエに引きこもり制作に打ち込む。

1985年 (61歳)

アトリエ兼自宅が全焼する。作品や資料を外に運び出そうとした際に重度の火傷を負う。

1987年 (63歳)

火傷の後遺症により逝去する。